

12. 人の集うまちを取戻す

大塚を楽しくする会
(島根県安来市)

1. 活動の背景と目的

私たちに必要だったのはきっかけだけだったのかも知れません。この助成を受けた事によって行政や寄付金などから離れた、独自の資金を持つことができたことのほかに会自体の存在が認知されました。今まで細々と活動していたのが一気に多くの仲間を呼び込むことになりました。

大塚の町はかつては宿場町として賑わい、たくさんの人の往来があり、店が軒を並べていました。しかし、団塊の世代が過ぎた頃からご多分にもれず過疎の町をまっしぐらに突き進んで行きました。小学校は統合され、人口は減るばかり、老人の比率は高まるばかり、明き家は増えるばかり、かつては栄えた商店も閑古鳥がなくばかりです。このままではいずれこの町は消え去って行くしかないように思えます。特に商店の経営者にとっては差し迫った問題でもあります。

「大塚を楽しくする会」は4、5年前に結成されました。そのきっかけは今回の主役の場でもある「細田家」の解体話でした。本道りに面した家がなくなってしまうのは惜しい、なんとかしようと言うのが初めの集まりで、紆余曲折を経て「細田家」を残すことができました。その時集まったメンバーはほとんどが40代の5、6人で、一時的には他の団体にも呼び掛けていろんな事業を展開することができました。しかしそれは長続きせず、たまに集まって



大塚商店街にある「細田家」

話をするだけの会になっていました。しかし思いはいつも何とかしなければ大塚は寂れて行くばかり、子供たちも出て行くばかり。我々はここに子供の頃から住んでいて、これから何をすべきなのかということ。

昔人口が多かったのはそれなりの理由があったからです。一言で言えばこんな田舎でも大勢の人を養うことができたからです。農業や林業で食え、商売もでき、サービス業も付随して成り立ちました。基幹となる産業があったからです。今それらはありません。かといって新たな産業をおこす事は簡単ではありません。であれば人を集めるのは一時的なことと、何かのために定期的によそから来てもらうことしかないように思いました。それともう一つ、今この町にいる子供達に、自分が生まれ育った故郷をたとえ出ていくにしても、良く知ってもらわなければならない、故郷に誇りを持ってもらわなければならない、それをわれわれが教えなければなりません。

II. 人の輪が広がった

そこへこの助成金の話が決まりました。子供達に大塚の歴史を教えるための「細田家」を利用した大塚歴史資料館、人を呼ぶイベントとして大塚楽市、定期的に人に来てもらい、遊休農地を有効に利用するための市民農園などの事業を考えました。助成金を削られた関係上、市民農園は断念してその他の事業をやることにしました。

この助成を受ける話が決まった頃、我々よりもっと若い層から大塚の秋祭りの「秋葉祭り」を若者感覚を取り入れて盛大にやろうという話が持ち上がりました。昔盛大だった祭りも今は寂れてきていたのですがこれも昔の賑わいを取り戻そうということで盛り上がりました。彼等も実は助成金のことを聞いてそれを当てにしていたようですが、我々の目標はたくさんの仲間を集め賑やかにやろうという事でしたので大歓迎です。「大塚楽市」を秋葉祭りに引っ掛け、さらに祭り全体と一緒に盛り上げていくことになりました。彼等には彼等の仲間がいるもので、我々のルートとは違ったところからまたたくさんの人間を呼び込むことになりました。当初から、農業関係の団体、商工会、消防団、老人会などとの連携は考えていたのですが、そのどこにも属さない若い連中が大勢参加してくれることになりました。

III. 1年のあいだにいろんなことをした

4月、空き家である細田家を資料館にすべく第一段階としてまず持ち主から借りなければなりませんでした。快く貸していただくことになりました。それから夜な夜な細田家を会場に、祭りや資料館のための準備が始まりました。今まで顔を合わしても挨拶を交わすだけの人間や、全く知らなかった人間が参加して、約50人もの若い連中が名を連ねることになりました。

秋葉祭りは火の神様の祭りです。7月23日、24日の二日間幸い土曜、日曜です。我々は「大塚夢芝居」という名をつけ「大塚フェスティバル」と銘打って準備を始めました。楽市はオークション形式で、その他にロックコンサート、ストリートバスケットボール大会、屋台村、囲碁選手権が新たに我々で計画したものです。そして従来からあるもので、小学生の楽団の行進、子供御輿、安来節大会、本御輿、ちびっこ相撲大会、花火、太鼓と様々なものが入り交じって繰り広げられました。前日まで降った雨がその日の朝やんできれいに晴れ上がったのも幸運でした。二日間の人の出の多さは近年なかったものでした。



フェスティバルのコンサート



本御輿

9月に入り、資料館会館の準備に入ります。大塚は以前ガットの生産地としてかなりのものでした。このガットは羊ではなく鯨の皮や髭を使った物です。それらの展示や、大塚が江戸時代に生んだ大相撲の力士 釈迦嶽の等身大模型が目玉です。釈迦嶽は身の丈 2270 mm の大男です。それを発泡スチロールを組み合わせて作って行きました。その他に大塚の古い写真を集めたパネル、資料のパネル等用意して行きました。

10月、助成が決まった後、事業の変更として挙げた大塚のダム湖周辺公園の整備に向かいました。公園は30年前にできた物ですが手入れをしていた老人たちが元気がなくなり、荒れ放題になってしまいました。整備は老人会の要請でした。桜の名所、自然が一杯の公園を蘇らせるのは、雑木などのワイルドな自然が一杯の状態からでは元に戻すのは大変な作業でした。結局96年の桜が咲く頃、やっと広場を取り戻し、格好が付きました。

11月資料館の準備が何とかできました。等身大模型などは間に合わせでしたが、何とか格好をつけ、とりあえず2日間だけの歴史資料館として始めました。子供達のために映画の上映、余った発泡スチロールを使った工作大会、当て籤大会。昔の遊び復活等のコーナーも作りおおにぎわいでした。資料館は展示をそのままにし、本格的な開館の準備として若者たちの集まる宿となり、新たな展示物を作る場となり、前にも増して人の集まる場となりました。

12月、大晦日には遠く都会から帰った者たちも呼んで忘年会と新年会を連続で行いました。

1月からは夜な夜な模型の仕上げ作業です。削って削って和紙を張って着物を着せたりまわしをつけたりやっと完成が近づきました。



大塚出身の力士「釈迦嶽」の模型

IV. 今年度は何をしよう

一時的に人を集め、盛り上がるのはそれほど難しいことではありません。問題はそれを継続すること、本当にまちづくりにつなげていくこと、町が本当に活気づいてくれることです。元気を継続させ、実利を上げ、人を巻き込み、人を呼びこんでいくためにまた何かをしていかなければなりません。祭りは今年もあります。もう準備が始まっています。完成した力士像をどうお披露目するか検討もしています。大塚を腸チフスから守るために作られた自前の簡易水道についても資料館の中で展示する用意をしています。何時でも誰でも来れる資料館を恒常的にオープンして行かなければなりません。市民農園も実現させて行きたいし、祭りの団体名称になった夢芝居の元になった人形浄瑠璃も復活できればいい、いろんなことを考え実行しながら、金の算段と共に今夜も集まって酒を飲み飲み話しています。